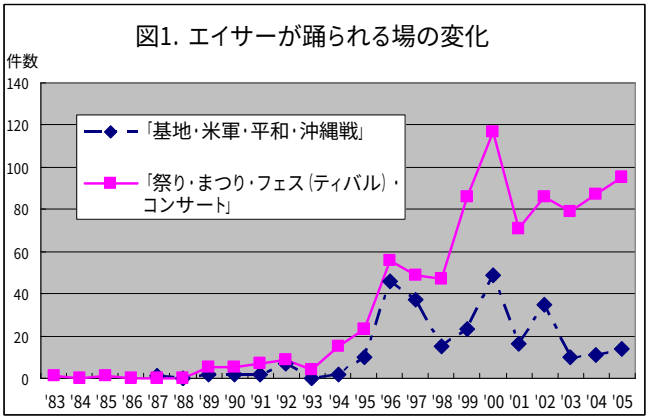
3．シマの身体から沖縄の身体へ　III

－都市の中の民俗舞踊－

岡本　純也

Ⅰ．はじめに

昨年の『一橋大学スポーツ研究』においては、この約 20 年間にわたるエイサーの動向について、全国紙のデータベースを手がかりに考察を試みた。その結果、1990 年代後半より、エイサーを扱う記事の件数が急激に増大していることが読み取れ、このことは沖縄以外の地域におけるエイサーの踊り手の増加、エイサーが踊られる機会の増加を表していると考えられる[1]。踊りの場の変化に関しては、'90 年代には沖縄の基地問題解決を訴える政治的な主張をもった集会などで踊られる機会が多かったが、徐々に政治的な色合いのない、「沖縄」をテーマにした祭りや物産展、観光イベント、または沖縄をテーマにしない地域の祭りなどで踊られることが多くなっていった。それを端的に表しているのが、図 1 となる。全国紙データベースにおけるエイサーに関する記事中、「祭り」「まつり」「フェス（ティバル）」といった言葉が含まれるものは増加しているが、「基地」「米軍」「平和」「沖縄戦」などの含まれるものは減少傾向にある[2]。



このような傾向はみられるものの、全体としてエイサーが沖縄以外の地域で踊られる機会は明らかに増大している。そしてここ数年、新宿や町田などの都市部でも「エイサー祭り」が催され、そのような場では、沖縄出身者以外が中心となった「クラブ型」のエイサー団体が多く出演するようになっている。

なぜ '95 年以降、急激に沖縄からの米軍基地撤廃を訴えるような政治的集会でエイサーは踊られるようになったのか、そして、なぜ '00 年以降、エイサーが踊られる場がより消費傾向の強い沖縄をテーマにした「祭り」や「フェスティバル」に変化していったのか、本論では、'75 年以降、都市で踊られるようになった沖縄出身者によるエイサーに着目し、沖縄以外で踊られるエイサーの変化について考察する。

Ⅱ．1975 年のエイサー－その 1：横浜市鶴見区

沖縄をはなれ、都市部でエイサーが継続的に踊られるようになったのは 1975 年からであるといわれている。この年、横浜と大阪でほぼ同時に催された「エイサーの夕べ」と「沖縄青年の祭り」のエイサーは、沖縄から本土へ働きにやってきた青年たちによって踊られた。そしてこれらのエイサーは、沖縄をとらえ、規定し続けてきた本土の者の「まなざし」と自文化に愛着をもちつつ、それを思うように表出できなかった踊り手（沖縄出身者）の「思い」の上に成立していた。

1975 年の 9 月に横浜市鶴見区で「第 1 回エイサーの夕べ」を主催したのは「関東沖縄青少年の集い　ゆうなの会」（以下「ゆうなの会」）であった。「ゆうなの会」は 1974 年に設立された沖縄出身青年男女の互助組織である。1970 年代、沖縄の本土復帰の前後の時期には、多くの青年が沖縄から集団就職で首都圏にやってきた。彼ら／彼女らは過酷な労働条件下で働き、沖縄出身ということだけで差別を受けた。こうした中、互いの交流を

深め、「構造的な抑圧が沖縄青年にもたらす孤独や悩みを、共有する場」として「ゆうなの会」は設立されたのである[3]。東京 4 支部、神奈川支部、千葉支部がそれぞれハイキングやスポーツ大会などの活動を行っていたが、6 支部合同の活動として 1975 年から「エイサーの夕べ」が催された。

この「エイサーの夕べ」を開催するにあたっては、沖縄出身者からの反対意見も多かったという。開催地の横浜市鶴見区は、大正期より沖縄からの移住者が多く住んでいたが、彼ら／彼女らは沖縄出身者に対する差別や偏見の中、沖縄の文化を「隠して」生活を続けてきた。この世代の人々からみるとエイサーを人前で踊るということは、これまで「隠してきた沖縄」を本土人の眼前に晒すことになる。したがって、エイサーは沖縄人の「恥」をさらすものとして拒絶する者もあったのである。

しかし、一方で、「エイサーの夕べ」は、今まで隠してきた、いや、隠さざるを得なかった「沖縄」を表出し、そして楽しむ機会を沖縄出身者に与え、沖縄人としての「自信回復」の契機ともなったのである。

横浜市鶴見区で長年にわたってフィールドワークを続ける人類学者の小林香代は、「ゆうなの会」の機関誌から以下のような文章を、当時の観客と踊り手の「思い」を理解するものとして引用している。

「おばさんたちは涙を流しながらよろこんでいた。そして、何度も来年もぜひやってくれと頼んだ。その気持ちは決して、私たちの考えているようなまやさしいものではないと思う（ゆうなの会機関誌『ゆうなの花便り』第 4 号、31 頁）。[4]」

「意識してやっているかどうかはわからないんですけど、本土に出てきた沖縄青年たちに自信を与えたというところで大きな意義があったと思います（『ゆうなの花便り』第 15 号、37 頁）。[5]」

これらの当事者の言葉には、当時の沖縄人に対する本土人からの「まなざし」とそれによって自文化を隠そうとした沖縄人の意識が表されている。当時の沖縄人に対しては本土人から「好奇と憐憫のまなざし」が向けられたが、その背景には'60 年代～'70 年代はじめの「沖縄報道」があったと小林は指摘する。この時代、「沖縄は『米軍統制下』にあり、『かわいそうな暮らしをしている』、ゆえに『復帰』によって彼らを『救ってあげなくては』という論調が支配的だった[6]」。このようなまなざしは、「沖縄青年たちを『私たちと異なる、かわいそうな沖縄人』として規定しつづけ」、そこから逃れようとした者も「やはり『沖縄を隠さ』ねばならなかった[7]」。しかし、エイサーは「『恥ずべき沖縄』ではない『沖縄』、『誇らしい沖縄』が可能であることを、『ゆうなの会』会員たちに、そして鶴見の観客たちに知らしめた」のである[8]。

エイサーはもともと沖縄で「シマ」と呼ばれる地域共同体の青年によって踊られ、シマごとに踊りの型、使われる民謡の種類、太鼓の種類、衣装などが異なる。いわば、沖縄でエイサーを踊るということは、シマを表象することになるのである。しかし、「エイサーの夕べ」で踊られたエイサーは、「個々のシマのもの」ではなく、「沖縄のもの」となり、「沖縄」を表象するようになったのである。小林は、その理由を、本土で暮らす沖縄出身者を「沖縄人」として規定しつづけた本土人のまなざしにもとめる。

「同じエイサーでも沖縄で見るのと東京で見るのとでは感じ方が違うと思います。沖縄では道で出会っても、よその部落の人とは全然話しもしないのに、東京では同じウチナーンチュということで十年も前からの友達のようにはなしている。（『ゆうなの花便り』第 15 号、39 頁）[9]」

本土で暮らす沖縄出身者は、沖縄内の出身地はさまざまに違えども、同じ「沖縄人」としてまなざされ、互いに苦しみや悩みを共有する同士として、エイサーによって交流を深め、心を一つにするようになったのである。

Ⅲ．1975 年のエイサーーその 2：大阪市大正区

横浜の鶴見で踊られたエイサーを成立させた、「本土の者のまなざし」と「自文化に自信がもてなくなっていた沖縄出身者」という構造は、当時の大阪にも同様にみられたものである。1975 年 9 月に大阪市大正区で開催された「沖縄青年の祭りエイサー、クイチャー、マミドーマー、カチャーシー広場」の主催者は「関西沖縄青年の集い　がじゅまるの会（現「がじまるの会」)」であった。この組織は関東における「ゆうなの会」と同様に「一、沖縄青少年は団結しよう　一、集団・単身就職者の生活と権利を守ろう　一、沖縄の自然を守り、文化を発展させよう」というスローガンを掲げ、関西在住の沖縄出身の青年の交流と親睦を目的に設立された[10]。このようなスローガンが掲げられた背景には、やはり本土の者からの偏見、差別に悩み苦しむ沖縄青年が多かったという理由があったのである。

「沖縄青年の祭り」が開催された大阪市大正区は、戦前から紡績工場や鉄工所が建ち並ぶ大阪有数の工業地帯であり、多くの沖縄出身者が移り住んだ地域である。現在でも約八万人の人口のうち二万人を沖縄出身者とその家族が占めている。この地に住み、「がじゅまるの会」の設立、「沖縄青年の祭り」の開催に携わった金城馨氏は、新聞の取材に答えて「当時は、沖縄出身者に対する差別もあり、沖縄文化を否定しようとする風潮が出身者自身の中にあった」と述べている[11]。そして、「エイサーを通じて、ウチナーンチュ（沖縄人）の自信を取り戻し、差別をはね返すエネルギーにしてもらいたいと考えたんです」と回顧して語っている[12]。「沖縄人」として差別され、自文化を否定し、その「自信喪失」状態の打破をエイサーに託すという、横浜でみられた構図は、大阪においても同様にみとめられるのである。

そして、これも鶴見のエイサーと同様に、沖縄内部に存在する地域ごとの独自色を前面に出さずに、「沖縄」を表象するものとしてエイサーは位置づけられていくのである。開催当初「沖縄青年の祭り　エイサー、クイチャー、マミドーマー、カチャーシー広場」と祭りの名称には沖縄内部の地域色のある芸能(クイチャー:宮古島地方の芸能、マミドーマー：八重山地方の芸能、カチャーシー：沖縄全体にみられる芸能）が連ねられていた。しかしながら、「沖縄青年の祭り」は「エイサー祭り」としてエイサーをメインに据え、30 年以上もの間、回を重ねながら現在も行われているのである。大阪においてもエイサーが、本土人によるまなざしに対抗し「誇らしい沖縄」を表出する手段として、また沖縄の様々な地域から関西にやってきた沖縄青年を一つに結びつけるものとして、選ばれたのであった。

Ⅳ．平和な沖縄を訴えるエイサー

横浜と大阪でエイサーが踊られるようになった経緯と本土に渡った沖縄出身者がどのような思いでエイサーを踊り続けてきたのかを理解するならば、’95 年以降に急激に増加した、沖縄の基地問題解決を訴える政治的な集会の場においてエイサーが踊られた理由も理解できよう。図 2 は全国紙四紙の記事データベースにおけるエイサーに関する記事中、「基地」、「米軍」、「平和」、「沖縄戦」という言葉を含む記事の件数の推移を表したものである。’95 年から ’96 年にかけ急激に増大し、’00 年の「九州・沖縄サミット」の開催年、’02 年の沖縄本土復帰から 30 年の年に再度増加して近年は減少傾向にある。

1995 年 9 月に起きた米軍兵による少女暴行事件[13]をきっかけとして、沖縄県内、そして全国各地で沖縄の基地問題解決を訴える集会が催された。そのような政治的メッセージをもった集会の場でエイサーは踊られることが多かった。それをグラフは表しているのである。たとえば、’95 年 11 月 26 日東京での米軍基地撤去を求める集会、’96 年 1 月 14 日名古屋での少女暴行事件抗議集会、’96 年 2 月 16 日東京での米軍基地などをテーマにした創作劇、’96 年 3 月 20 日大阪での「基地のない

平和な島を」求める集会、'96 年 6 月 22 日広島での平和集会、'96 年 9 月 8 日京都での基地撤廃を求める模擬投票、'97 年 4 月 18 日大阪での特措法反対集会、'97 年 11 月 6 日香川での沖縄をテーマにした講演会などでエイサーは踊られた。これらの集会は、沖縄での基地反対運動の高まりに呼応する形で催されたのである。

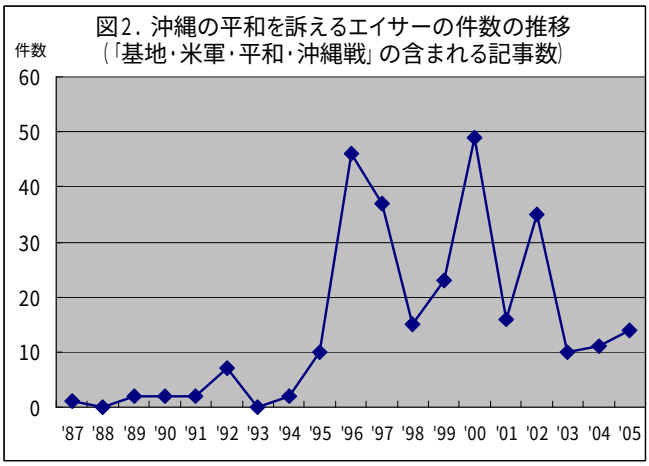


図2. 沖縄の平和を訴えるエイサーの件数の推移
（「基地・米軍・平和・沖縄戦」の含まれる記事数）

'96 年 11 月 26 日の集会を報じる新聞記事をみてみよう。

「『ウチナー（沖縄）は怒っているぞ』。沖縄の米軍基地の整理・縮小問題で、軍事基地の全面撤去や日米安保条約の廃棄を求める市民集会が二十六日、東京・日比谷の野外音楽堂で開かれた。首都圏に住む沖縄県出身者ら約千人が参加し、米軍用地強制使用のため署名代行の手続きを始めた政府の対応に批判の声が相次いだ。

東京沖縄県人会青年部や沖縄一坪反戦地主会関東ブロックなどの呼びかけで結成された『軍事基地はいらない大行動『沖縄の心を世界へ』実行委員会』の主催。

集会では、同青年部役員らでつくる『わったー（私たちの）ランドネットワーク』の与那嶺貞子さん（三八）が主催者を代表して『沖縄戦を体験した県民にとって基地は耐え難い存在だ。女性や子どもの尊厳を傷つけた米兵による少女暴行事件を二度と繰り返さないため、基地のない沖縄の実現を』とあいさつした。

集会のあと、参加者は霞が関の外務省前や繁華街をデモ行進＝写真。エイサー（盆踊り）で着る衣装をまとった若者らを先頭に、太鼓を打ち鳴らしたり、沖縄の民謡を歌ったりしながら、『村山首相は署名代行をするな』などと訴えた[14]。」

同様な政治集会が、'00 年の「九州・沖縄サミット」の開催に伴い、また、'02 年の「沖縄本土復帰 30 年」の年には多く開催された。そのような場でエイサーが踊られたことに関して、昨年、筆者は以下のように述べた。

「しかしながら、平和へのメッセージの発信と民俗舞踊にはいったいどのような関係があるというのだろうか。たしかに、大きな太鼓を叩きながらダイナミックに踊るエイサーは、人びとの目を引きつけるには格好のパフォーマンスとなるのは事実である。だが、単に人びとの目を引きつける鳴り物が欲しいならば、他にもさまざまな手段が考えられても良い。特に沖縄の伝統的な文化という点にこだわったとしても、綱引きに用いられるホラ貝やハーリー（爬龍船競争）に用いられる鉦であっても良いはずである。これらの集会や講演会でエイサーが踊られたのは、この民俗舞踊が、沖縄の社会や文化を表象するものとして主催者や参加者にとらえられていたからだと考えられる[15]。」

上記新聞記事にあるように、沖縄の基地撤廃を求める集会を主催したのは本土で生活をする沖縄出身者であった。彼らが政治的主張を表明すると同時にエイサーを踊るのには必然性があったのである。沖縄の基地問題、すなわち沖縄に国内の 75％もの米軍施設を負担させていることによって生じる人権侵害や生活が脅かされるという問題に、沖縄出身者は、本土人による、あの差別・偏見のまなざしを読み取ったのである。そして、それに対抗する「沖縄」を表明するには、「誇らしい沖縄」を表現でき、沖縄出身者に自信を回復させたエイサーであることが重要だったのである。ホラ貝やハーリーの鉦ではなく、'75 年以降、本土での苦しみを乗り越えるため、そして自文化に触

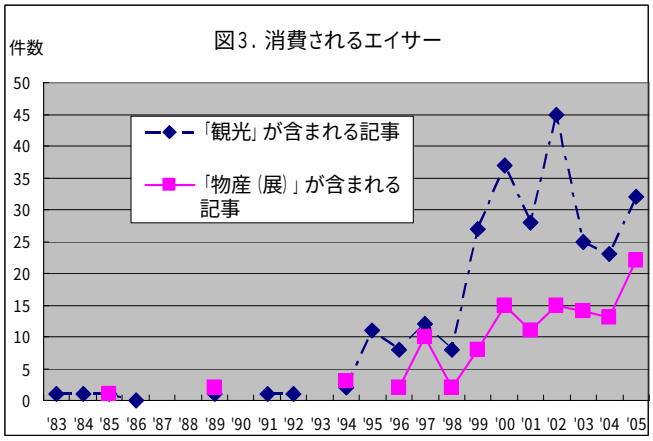
れる喜びを共有するために「沖縄」を表象するものとして踊り続けてきたエイサーでなくてはならなかったのである。

Ⅴ．まとめにかえて－消費傾向の強まるエイサー

先に紹介した小林は、エイサーが急激に拡大していく傾向の要因として、「『エイサー団体』の存続を容易にする社会経済上の環境的諸条件が、2000 年以降、急速に整い、『沖縄』の消費対象化が進んだ」ことをあげている[16]。具体的には、「沖縄出身」タレントの人気による「カッコイイ」沖縄の創出、沖縄を舞台にしたテレビドラマによる「沖縄」との接触機会の増加、沖縄県産品の流通拡大による「沖縄趣味」の日常化・大衆化などである。また、「よさこいソーラン」などの伝統芸能を現代風にアレンジした舞踊の流行、沖縄の自治体との姉妹都市関係を背景とする行政の後押し、保育園や小・中学校、高校の運動会や学園祭、「沖縄」学習を通したエイサーの浸透も、その隆盛に影響を与えていると指摘している[17]。

小林が指摘するように、「沖縄ブーム」ともいわれる、沖縄の事物を消費する傾向は確かに近年高まってきており、エイサーもその消費対象の一つとして流行してきていると考えられる。図 3 は、エイサーに関連する記事中、「観光」と「物産」という言葉が含まれる件数の推移を表したものであるが、ここにも、沖縄をテーマにした「観光フェア」や県産品を売る「物産展」などでエイサーが踊られるようになっていることが表されている。

この結果に、図 1 でみた政治的な意味合いの薄い「祭り」や「フェスティバル」等の場でのエイサーの隆盛を合わせて考えるならば、エイサーは沖縄が置かれた政治的な状況を含めて表象する舞踊から、日本の内部にありながらエキゾチシズムを駆り立てるような「観光地」としての沖縄、おおらかな人々の住む「癒しの島」としての沖縄といった、本土の者にとって「都合のいい」沖縄を表象する舞踊へと変質していっているといえるであろう。



このような傾向を当事者である沖縄の人々、沖縄出身者はどのようにとらえているのであろうか。現在のエイサーは、沖縄だけでなく、本土の大都市で行われるイベントにおいても多くの観客を魅了し、人気のある舞踊となっている。この点では、かつて自文化を「隠さ」ざるを得なかった沖縄出身者からみれば、ある面では「誇らしい沖縄」をエイサーが表現しているようにもみることができる。しかしながら、他方で、米軍基地問題などの、現在でも沖縄が強いられている過酷な状況から、巧みに目をそらさせるような機能をも担うようになっているのである。われわれは文化のもっている、そのような機能を指摘し、警告を発する目取真俊の次の言葉を忘れてはならない。

「同じような例として『本土』の県人会の問題も言われます。沖縄県人会にヤマトンチューが入ってきて、方言の勉強をしたり、三線を習ったり、エイサーをやる。そのうち彼らが中心となって県人会を仕切り、いつの間にか沖縄の人達が近寄りがたくなってしまう。……

最近の県人会では、ヤマトゥンチューが主導権を握る中で、基地問題とか政治的なことはみんなに対立を引き起こすから、これはもうやめにしましょう、あくまでもエイサーだけにしましょう、という意見が出されて、日本が沖縄に対してふるっている政治的暴力が隠蔽される状況が生まれている、という話を聞いています。[18]」

本論でみてきたように、沖縄の「シマ」という文脈を離れ、都市で踊られるようになったエイサーは、本土人が沖縄に向けるまなざしに規定されながら、それに反発し、「自信」を回復しようとした沖縄出身者によって、沖縄を表象する身体として成立したと考えられる。時を経て、「沖縄ブーム」ともいわれる現在、エイサーは沖縄出身者以外の者も踊る都市の民俗舞踊として展開している。しかしながら、現在のエイサーも、かつてと同様に、本土人が沖縄に向けるまなざし、すなわち、自分たちにとって「都合のいい」沖縄しかとらえようとしないまなざしによって規定され続けているといってもよいであろう。

---

[1] 岡本純也、「シマの身体から沖縄の身体へⅡ―ヤマトゥへの普及過程―」『一橋大学スポーツ研究』vol.25、2006 年、19-26 頁

[2] 分析に用いたのは、朝日新聞社「聞蔵」（1984 年からの記事が検索可能）、読売新聞社「ヨミダス文書館」（1986 年 9 月からの記事検索が可能）、毎日新聞社「毎日 News パック」（1987 年からの記事検索が可能）、日本経済新聞社「日経テレコン」（1975 年 4 月からの記事が検索可能）の 4 つのデータベースである。一部、雑誌記事がデータベースに含まれるものもあるが（『週刊朝日』『アエラ』）、検索結果にはほとんど含まれなかったために、今回は新聞記事と同等に扱う。

[3] 「ゆうなの会」とエイサーとの関係については小林香代「首都圏におけるエイサーの創世―「ゆうなの会」を軸に―」『アジア遊学』No.53、52-60 頁参照

[4] 同上論文、56 頁

[5] 同上

[6] 同上論文、58 頁

[7] 同上

[8] 同上

[9] 同上論文、59 頁

[10] 成定洋子「関西のエイサー」、沖縄全島エイサーまつり実行委員会編『エイサー360 度』、那覇出版社、1998 年、275-280 頁

[11] 『朝日新聞』1999 年 9 月 11 日、大阪版朝刊

[12] 同上

[13] 1995 年 9 月に起きたアメリカ海兵隊による少女暴行事件は、その後の、日米地位協定の見直しや米軍基地縮小の運動の契機となった事件である。

[14] 『朝日新聞』1996 年 11 月 27 日、朝刊

[15] 岡本前掲論文、22 頁

[16] 小林前掲論文、53-54 頁

[17] 同上

[18] 目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』NHK 出版、2005 年、172 頁